

超越的か超越論的か

——柄谷行人の交換様式論をめぐって——

木下 聖三

目次

1. 理論と現実
2. 超近代か脱近代か
3. 交換様式の図式
4. LETS の失敗
5. 構成的な第四項の可能性
6. 超越的か超越論的か

1. 理論と現実

柄谷行人は「90年代に入って、理論は、たんに現状の批判的解明にとどまるのではなく、現実を変える何か積極的なものを提出しなければならない、と考えるようになった」[2001：15]と述べている。

その言葉通り、彼は2000年6月にNAM (New Associationist Movement) を立ち上げ、その理論的な根拠を提示すべく、2001年10月に批評空間社から『トランスクリティーク』を刊行した。

しかし会員数も伸びないまま、NAMは2003年1月に解消。この運動は失敗に終わった。

失敗の原因はさまざまに求められ得るが、柄谷の理論自体にそれを求める向きはあまりない模様である。柄谷自身も理論には問題がないと考えていたようで、『トランスクリティーク』の続編（いわば普及版）として、2006年『世界共和国へ』を著すに至っている。

私は柄谷の理論自体に誤りがあると考えている。彼は2001年の時点で萌芽的にしか提示し得なかったアソシエーションのイメージを、2006年までに緻密に練り上げて、ここに書いた、と述べる [2006:227]。しかしながら、『トランスクリティーク』ではアソシエーションの具体例としてNAMが挙げられていたのに、『世界共和国へ』では一切これに触れず、それゆえにかえって具体的なイメージは散失せられてしまった観がある。

NAMについての言及は、インタビュー記事においてのみ、これを見ることができると述べている。

「たとえば、地域通貨がうまく行けば、かならず税務署が来ますからね。国家にとって、それは脱税に見えるのです。しかし、逆にいうと、国家の保護の下では、それは簡単に成立するのです」 [2014:83]。

果たして、NAMの根幹を成していたLETS (Local Exchange Trading System) は税務署につぶされた、のであろうか。柄谷はそれらの失敗に検討を加えることなく、「これはむしろ現実的には存在しえないものです」 [2006:6] と結論づけている。とすると、NAMの失敗は予め定められていたことになる。

その後、(直接NAMを指してではないものの)「運動体というのは、永続するためではなく、むしろ自らを消滅させるためにあるといえます」 [2014:230] とさえ述べている。

2010年に入って、柄谷は(掌編『世界共和国へ』を本格的に展開した論考として)『世界史の構造』を発表、「一国モデルの限界」(『世界史の構造』 [2010:378ff.])、『世界史の構造』を読む [2011:19ff., 115ff., 182ff.] や「段階の飛び越え不可能性」(『世界史の構造』 [2010:383ff.])、『世界史の構造』を読む [2011:188ff.] を論じ、NAMに向けての従前の認識が楽観的に過ぎただと省みている。

「日本に欠けているのは「社会」の強さですね。社会主義というのは「社会」が良くないと成立しないのです。…僕はNAMの運動をはじめから、というよりそれ以前からもそうなのですが、考えていたのは、日本にはアソシエーションの伝統がないということでした。それがあるところでアソシエーションの運動をやるのと、そうでないところでやるのとはちがいます」[2012:140]。「[NAMがうまく行かなかったのは] ベースになるような多数のアソシエーションがなかったからです」[2012:210]。これらの発言も「[一国内における] 段階の飛び越え不可能性」を論じたものと言えよう。

このような整理はしかし、「段階」(stage)を「様式」(mode)や「位相」(phase)に換えて、歴史を説明し直すせつかくの試みを、元の「段階」論に差し戻す行為であるように思う。状況論への回帰は類型論を点検する際の妨げになってしまうのではないだろうか。

柄谷は一度だけ、信頼していた実務家が急死されたことをNAM解散の原因として述懐している(柄谷「政治を語る」[2012:92])。これは実に痛ましい現実である。しかし、むしろ、だからこそ、私たちは柄谷の理論の再点検に当たるべきなのではないか。

2. 超近代か脱近代か

柄谷の理論の粗捜しをする前に、まずはその試みの方向性を確認することから始める。これについては浅田彰によって手際よくまとめられているので、彼の発言を見ることにしよう。

浅田 生産そのものを交換から考える、生産様式を交換・交通様式から考えるというのは、非常に新しい見方だ、と思います。

(柄谷／浅田／高澤／萱野「誌上シンポジウム」[2006:10])

浅田 ある種の発展段階説に対し、共同体と国家と市場をいわば歴史とともに古い形として考え、それらの組み合わせによって歴史を考える。…そうした図式は、実証的ではないにせよ、現実の歴史を説明する図式

として非常に明解にできていると思います。

(柄谷／浅田／高澤／萱野「誌上シンポジウム」[2006：14])

まず、基礎的な交換様式を複数設定し、次に、それらの組み合わせにおいて歴史的な社会の形態を見る。『世界共和国へ』では、序と第Ⅰ部で、『世界史の構造』では、序説で、基礎的な交換様式とその組み合わせの図式が提示され、それぞれの続く部分で、その図式の歴史への適用が試みられているわけである。

柄谷は『世界共和国へ』の狙いをこう記している。

私がめざすのは、複数の基礎的な交換様式の連関を超越論的に解明することです。それは経験的な事実と対応しないわけではないが、私の関心事はそこにありません。私が示したいのはあくまで、資本＝ネーション＝国家という環を出す方法です。[2006：40]

そして、「資本＝ネーション＝国家」という環の成立する前後で時代を区分し、第Ⅱ部でそれ以前（前近代）を、第Ⅲ部でそれ以後（近代）を、第Ⅳ部でさらにその後（脱近代）を描いていくのである。

柄谷の問題意識をこの構成に見ることができる。近代システムの機能不全を克服する方法は一般に二通り挙げられる。一つは近代化の徹底であり、もう一つは近代の外に出ることである。前者は近代化の不十分さを問題視し、後者は近代化そのものを問題視するものである。ポスト・モダンという段階は、前者の立場からは「超近代」（あるいは「後期近代」）と見なされるべきであり、後者の立場からは「脱近代」（あるいは「近代以後」）と見なされるべきであろう。柄谷は無論、後者の立場に属するものである。

3. 交換様式の図式

さて、いよいよ柄谷の理論の点検に取り掛かることにしよう。すでに見てきたように、彼の理論の肝は、交換様式の図式にこそある。それは既に『トランスクリティーク』で示されたのだが [2001 : 406]、『世界共和国へ』において改めて、一つの座標系として提示されている。「四つの交換」の図 (図1) [2006 : 22] と「資本制社会構成体の構図」の図 (図2) [2006 : 39] こそがそれである。



図1 四つの交換



図2 資本制社会構成体の構図

柄谷はまず、「互酬」、「再分配」、「商品交換」、という三つの交換様式を列挙した後に、唐突にもう一つの交換様式を挙げる。

さらに、私はこの三つのタイプの交換のほかに、もう一つの交換様式を X としてあげておきます。これは現実には存在しているわけではないが、つねに理念としてありつづけるような形態です。[2006 : 23]

同様に、「ネーション」、「国家」、「資本」、という三つの社会集団の様式に加えて、やはり唐突にもう一つの社会集団の様式を挙げるのである。

アソシエーションが交換様式 A・B・C と異なるのは、後者が実在するのに対して、想像的なものだという点です。…とはいえ、それはたんに観念ではなく、現実には大きな役割を果たしてきました。…ゆえに、交換様式の諸相を考えると、D の次元を省くことはできません。[2006 : 38-39]

しかも、「ネーションは、互酬的な関係をベースにした「想像の共同体」です」[2006 : 38] と述べた直後に、ネーションなどが「実在する」のに対してアソシエーションは「想像的なもの」だ、と言うのである。

かくも無限定に第四項は設定されているのだが、柄谷はこれを根拠にして、NAM や LETS に取り組んでいたわけである。それらの運動が瓦解した現在も、この第四項を「構成的理念」ならぬ「統整的理念」として、掲げ続けている。

統整的理念は、決して達成されるものではないがゆえに、たえず現状に対する批判としてありつづけます。[2006 : 185]

理念と呼ぶにはあまりに無限定な第四項を可能にしているのは、座標軸の定義（無定義）である。一目して分かるように、これらの図においては、座標軸の定義が与えられていない。たとえば小田亮の提示する「交換の四角形」の図（図 3）[1994 : 98] に比するならば、柄谷の図式の熟成不足は明らかであろう。

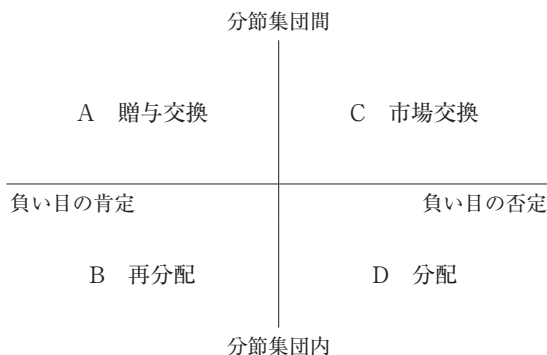


図3 交換の四角形

果たして、柄谷に欠けていたのは「分配」の概念であった。このことは次の記述からも分かる。

ポランニーは、未開社会には互酬と再分配があるというのですが、その場合の再分配は互酬的交換のなかに入れて考えるべきです。たとえば、狩猟採集社会で、各人が猟や採集で得た獲物を最終的に再分配する場合、それは互酬的な平等原理によるものです。[2006：50]

これなどはまさに「分配」の好例であろう。分節集団内における交換様式の区分を導入しないならば、むしろこれを「再分配」に分類する方が妥当であるとさえ言える。柄谷としてはしかし、「再分配」を国家に固有の原理である、と見なしたいために、「分配」に当たる交換様式との区別は導入しておきたい。だが、第四項は交換様式Xのために空けておかなければならない。そこで「分配」に当たる交換様式を「互酬」的交換様式に含めるべきである、と言うわけである。このような操作が可能なもの、座標軸の定義が為されていないからである。

『世界史の構造』では、マーシャル・サーリンズの議論を参照しつつ、「互酬」と「共同寄託」とを区別すべきだと述べ、後者を改めて「再分配」に分

類し直している（『世界史の構造』[2010：8-11, 52-56]、『「世界史の構造」を読む』[2011：101-102]）。つまり、「分配」に当たる交換様式を「再分配」に振り分け直したわけである。また、「不平等か平等か」、「拘束か自由か」という具合に、座標軸を再設定してもいる（『世界史の構造』[2010：15]）。後者は「負い目を肯定するか否定するか」という問題と重ねて見ることができるし、前者も（エミール・デュルケームによる社会類型論に準ずる）「有機的か機械的か」という問題と重ねて見ることができる。しかしながら、その結果、見えてくるのは、やはり「構成的」な平面に「統整的」な第四項を押し込まんとする無理である。大体「交換様式 D は交換様式 A の高次元での回復である」ならば、それは「交換様式 A」ではないか。いっそ、四象限図式にこだわらず、三項仕立てに留めた方が整合性は保たれるように思う。

「構成的」にであろうが「統整的」にであろうが、正体の知れぬ交換様式 X を（正体を明かさぬまま）一つの交換様式平面に押し込むのは無理であろう。

4. LETS の失敗

LETS の失敗は交換様式 X の無理と大いに関係がある。LETS は地域交換取引制度と訳され、柄谷によれば次のようなものであった。

LETS は、参加者が自分の口座を持ち、自分が提供できる財やサービスを目録に載せ、自発的に交換を行い、その結果が口座に記録される多角決済システムである。[2001：44, 435]

LETS は単なる「地域通貨」ではない、とも述べていて、彼はおそらく、財やサービスの「分配」をイメージしていたのではないだろうか。しかしこれをシステム化しようとする、と、「肩叩き券」のようなものにとどまるに違いあるまい。

LETSは地域通貨でも肩叩き券でもない何かとして、しかし何かは分からないままに始められたのだが、交換様式Xの図式化と同様、そこには無理があった。LETSは地域通貨か肩叩き券かいずれかである他はなかったのである。そしておそらくは、肩叩き券的なものとして自然消滅していったのである。

では、地域通貨としての可能性はなかったのか。当時は地域通貨の可能性についての議論が盛り上がりを見せていた時期でもあった。1999年5月にNHKで「エンデの遺言」が放映されたが、これなどは、それまでの20年間のNスぺの中で視聴率10%を超えた、唯一の番組だった、と言われているほどである。

2001年10月には、坂本龍一を案内役とする続編が放映されている。私見では、地元商店街で購入代金の一部として使用できるなど、法定貨幣との可換性が高いものほど成功しているようであった。そして、それは顧客の囲い込みを狙った、大手小売業者などによって開発されつくした手法、つまりポイントカードやキャッシュバックのシステムと変わらないものであるように思えた。あえて違いを見出すならば、地元商店街を愛する気持ちの有無であろうか。

スラヴォイ・ジジェクは『トランスクリティーク』を評する文中で、LETSについて次のように批判している。

これがいかにして、柄谷が別な文脈で指摘している重大な罣を回避することが出来るのかを見ることは困難だ——もはや物神ではなく単に「労働貨幣」として機能する交換の媒介物、社会的生産物への個々の貢献を指示する透明な道具の罣。[2004：104]

貨幣には購買力（直接的交換可能性の権利）があり、「それが貨幣をもつ者と商品をもつ者との関係を非対称にする」[2006：76]、と柄谷は述べるが、LETSはそのような貨幣の性質を何ら免れ得ていない、というわけである。

柄谷はジジェクからの批判を意識してか、『世界共和国へ』ではこう述べ

るに至っている。

オーウェンをふくむカード派社会主義者は、貨幣を廃止して労働時間を示す労働証票を使うことを考えたのです。…彼らは貨幣を否定するが、実は暗黙裡に貨幣を前提しているのです。[2006：73]

これはそのまま LETS 批判になっている。ありもしない交換様式 X を掲げ続けるのは、もう止めるべきであろう。「構成的」にのみならず「統整的」にも。

5. 構成的な第四項の可能性

さて、NAM にも参加していた坂本は、一方で2003年6月、小林武史、櫻井和寿とともに ap bank を設立している。ap には、Artists' Power というプロジェクト名に加えて、Alternative Power の意味も込められているようである。

これは2003年6月に有限責任中間法人としての許可を得て、2004年5月に貸金業としての登録を完了した非営利組織で、web 上の案内では「可能性ある新しい未来をつくろうとしている環境プロジェクトに融資を行う」旨を謳っている。

これなどは、貨幣を「分配」の資財に転換する活動であり得るのではないか。寄付でなく融資とすることによって、負い目を最小化しつつ、参加アーティストが持ち寄った資金を借り手ともども共有する試みである、と評するのは嘆し過ぎであろうか。

ともあれ、ap bank に見るべきは、交換様式の転換可能性である。このような可能性について、高澤秀次が柄谷を問い質す、次のようなやり取りがある。

高澤 第二部の3章、四つ目の交換様式ということで柄谷さんは、「第

三象限の市場経済の上で、第一象限の互酬的な共同体を回復しようとするもの」がアソシエーションだとおっしゃっています。ただこの場合の回復されるべき共同性なり共同体のイメージが、少し僕には分からないところがありまして、今日はそれをうかがおうとおもっていたのです。

柄谷 具体的にいえば、それは、資本主義的でない、オールタナティヴ経済において出てくると思います。現実的にはコンミュンや地域通貨みたいな形であって、つまりローカルには実現されるんだけど、グローバルズムに対しては理念としてあるほかないということだと思いません。

(柄谷／浅田／高澤／萱野「誌上シンポジウム」[2006：15])

柄谷の答えは全く具体的ではない。LETSの失敗を受け止めることもできていない。高澤の方が柄谷の意図を超えて、交換様式論の可能性の核心的な部分を示し得ているのではないか。

『世界共和国へ』中、高澤の引く部分と同様の記述を以下に抜粋しよう。

それ〔アソシエーション〕は、商品交換（C）という位相において聞かれた自由な個人の上に、互酬的交換（A）を回復しようとするものだといつてよいでしょう。[2006：38]

それ〔四つ自の交換様式〕は第三象限の市場経済（C）の上で、第一象限の互酬的な共同体（A）を回復しようとするものなのです。[2006：88]

アソシエーションイズムは、商品交換の原理が存在するような都市的空間で、国家や共同体の拘束を斥けるとともに、共同体にあった互酬制を高次元で取りかえそうとする運動です。[2006：179]

ところで、柄谷の言う互酬制には、先に見たように、「贈与交換」(A)と「分

配」(D) とが含まれている。だから、これらの記述は、交換様式 C の交換様式 A-D 系列への転換可能性を見出ださんとするものとして、読まれるべきなのである。

先に述べたように、その後、「分配」は「再分配」(交換様式 B) に振り分け直された。つまり、柄谷の言うところの互酬性(交換様式 A)に「分配」を含めないことが明示されたわけだが、柄谷は他方で、こうも述べている。

たとえば、災害時に、人々はホームレスになり、避難所などで一緒に食事をとるようになります。つまり、そのとき、彼らは狩猟採集民のような遊動民に似てくるわけです。遊動民は生産物を貯蔵したり私有したりしません。たえず移動する必要があるからです。だから、客人であれ、みんなに無償で分けてしまいます。定住し分断されたままで生きていた人たちが、災害において、突然、互いに遊動民のように、食べ物を分け合い、一緒に食べるようになる。そのとき、交換様式 D が出現するわけです。[2011 : 39-30]

これはどう見ても、「分配」に当たる交換様式の話である。交換様式 A に振り分けたり、交換様式 B に振り分けたり、はたまた交換様式 D に振り分けたり…。やはり、ここはひとまず、第四項も他と同じ「構成的」な項として仕立て直すべきではないだろうか。

6. 超越的か超越論的か

最後にもう一点。浅田とジジェクがほぼ同じ点についての危惧を表明している。それは柄谷が超越的な場所を志向している点についてである。柄谷は前章(第Ⅱ部2章)で貨幣に備わる強制力を批判しながら、次の章ではこう書くのである。

マルクスの考えでは、重要なのは一般的等価形態(貨幣形態)であって、

そこに位置する物ではない。…同様に、超越的なのは神ではなく、神がおかれる「場所」（一般的等価形態）です。…普遍宗教（世界宗教）は、共同体でも国家でもなく、市場的空間（都市）において出現し、さらに、かつて存在しなかったような空間、すなわち新たな交換様式を開示したのです。[2006：96-97]

浅田はこのような記述に対して、ニーチェ＝ドゥルーズにおいては普遍宗教の原理は同時に国家の原理でもあったことを指摘した上で次のような発言をしている。

ニーチェ＝ドゥルーズ的にいって、普遍宗教、とくにユダヤ教やキリスト教というのは、たしかに古い共同体から人を解放しはするものの、そのことで絶対的な束縛のもとにおくようなものと考えられているわけです。

（柄谷／浅田／高澤／萱野「誌上シンポジウム」[2006：14]）

ジジェクも文脈は違えど、浅田と同じことを述べている。

それ〔くじ引きで選ばれた代表〕は空虚な場、超越論的 X として存在し、実体的でポジティブな存在者として存在することはない〔と柄谷は言う〕。しかしながら、本当にこれは「権力のフェティシズム」を弱体化するのに十分なのだろうか？…真の任務はまさに、形而上学的命題（神、魂の永遠、等々）は、「消去された状態で」、前提条件として主張されているという、カントの解決法の基盤に従って、権力の場の神秘そのものを取り除くことではないか？ [2004：104]

思えば、柄谷の提示する第四項はいつも、他の三項に対して超越的であった。しかし、超越的ならざる一方からやはり超越的ならざる他方への転換可能性こそが本来、考えられるべき問題であった。権力の場の神秘も、各項の

相互転換可能性が確保されたときにこそ無化され得る。神秘性は超越的にして転入不可能な場所にこそ見出だされるものであるはずだからである。

柄谷はこう反論するかも知れない。そのような相互転換志向は、「国家機構による略取－再分配というメカニズムが、贈与－返礼という互酬の表象の下で機能する」[2006：129] 現状を追認する見方でしかない、と。

柄谷はこれを「擬制」(fiction)と呼んでいる。擬制とは相異なる事実を同一のものと見なして、同一の法律的効果を与えることだが、彼に言われるまでもなく、フィクションは「想像力」(imagination)によって成立せしめられている。国家による「互酬の擬制」[2006：49]は人間に備わる想像力を逆手に取った策略であると言えよう。

柄谷はこうも述べている。

多くの国で、ファシズムが強い魅力をもったのは、それがあらゆる矛盾を“今ここ”で乗り越える夢——実際は悪夢だ——のような世界のヴィジョンを与えたからである。[2010：391]

[ナショナリズムとアソシエーションイズム] いずれも、資本主義的な経済の中で生じる階級分解や疎外という現実に対して、交換様式 A を想像的に回復するものである。違いは、その回復がいかにしてなされるかにある。…ナショナリズムは、過去のあり方をノスタルジックに能動的に回復するものである。他方、アソシエーションイズムは、過去の交換様式 A を回復するとしても、意識的にそうするのではない。意識的には未来志向的である。したがって、後者の場合、現状を変革するものとなるが、前者は結局、現状の肯定にしかならないのである。[2010：393]

超越的な第四項を見るか否かが「未来志向」か「過去志向」かを分けるのであろうか。

私は何も、とにかく転換せよ、と謳いたいわけではない。相互転換の強制は不自由以外の何ものでもない。この場合、不転換可能性を確保すること

(つまり転入しないという選択肢を確保すること)が課題となる。

相互転換可能性には転換も不転換も含まれなければならない。「超越論的」(transzendental)とは元々、あらゆる経験を可能にする条件を問題化する立場を形容する言葉であった。ところが柄谷は経験を越えた、「超越的」(transzendent)な場所を求める迷路に入り込んでしまった。この探究は『トランスクリティーク』以来、混乱の度を深めているように見受けられるのである。

超克とは超越的な場所に入るのではなく、今この場所に内在しつつ、世界を擬制的に創り変えることであるはずだ。なぜならオリジナルな世界などここ以外のどこにも存在しないのであるから。

文献表

小田亮

1994 『構造人類学のフィールド』世界思想社

柄谷行人

2001 『トランスクリティーク カントとマルクス』批評空間

2006 『世界共和国へ——資本=ネーション=国家を超えて』岩波新書

2010 『世界史の構造』岩波書店

2011 『「世界史の構造」を読む』インスクリプト

2012 『政治と思想 1960-2011』平凡社ライブラリー

2014 『柄谷行人インタビューズ 2002-2013』講談社文芸文庫

柄谷行人／浅田彰／高澤秀次／萱野稔人

2006 「誌上シンポジウム『世界共和国』をめぐる」『at』4号

ジジェク (Slavoj Žižek)

2004 「書評 視差的視点——『トランスクリティーク』——」(遠藤克彦訳)『思想』8月号